

## 西国へ 小さな旅

旅の愉しみは日常にない景色や食事にふれ、時には思わぬ人との出会いもあるが、まずは旅立つことである。認知の MCI 域にあっても旅に出たい気持ちは相変わらず、予想される第 6 波の前にと考えた。月曜朝に発って金曜の晩に帰る僅かな日数で、かねて考えていた関門海峡、萩、津和野を巡り広島に立ち寄る小さな旅をした。

今回の旅でひととき印象に残ったのは ①門司港・三井倶楽部の海鮮焼きカレー ②萩の居酒屋で板前夫妻との出会い ③津和野で森鷗外旧居と記念館の佇まい であるが、本州西端の海と山の風土を実感したこともあって満足を得た。以下は旅先の簡略なりポートである。

海峡を挟む**門司港**と**下関**：門司港は‘時刻表’からの想像を超えたスマートな観光地で、レトロがハイカラと融和している。駅舎（旧 JR 九州本社ビル）と向かい合う三井倶楽部は松田兄弟が別々に設計したという文化財的建築であるが、灰色と黒の外観が好対照である。三井倶楽部の階上はアインシュタインと林芙美子の由緒を展示していて一見の価値あり。門司港は鹿児島本線のターミナルであっても、下関-門司-小倉（本線）の陰の感がある。駅舎のどこにも**門司港**や**JR九州**の標示が見当たらないのは、重要文化財だからか。北海道の旧室蘭駅も文化財と思うが立派な額縁付きの**室蘭驛**が掛かっていた。

下関は駅前にバスターミナルと商業ビルが並ぶが、2 階レベルの歩廊が 500m ばかり東へ延びて視線の先の海峡夢タワーと足下の椰子が観光地らしさを作っている。対岸門司港の展望タワーは四角の 31 階建てマンションであるが、こちらは一目で観光塔とわかるシックな佇まいである。一泊した火の山 YH は関門橋を眺める絶好の場所であった。

志士を輩出した**萩**：67 年前に 1 週間滞在した萩の今はどんなか想像できなかったが、垢ぬけた観光地になっていた。松下村塾を中心に据えた広い境内の松陰神社は然るべき雰囲気を感じていた。東まわり・西まわりの小型バスが独自の見どころを循環していて観光客と住民の足になっているのが気に入った。鉄道の父・井上勝を讃える萩駅、萩藩校のあとを継ぐ明倫館、これらを現代感覚で活かしている市役所を訪ねた。明倫館と向き合う庁舎の外観もさることながら、玄関ロビーの空間に圧倒された。正面の壁を埋める提灯を背にしたグランドピアノ、残念ながら演奏が終わっていたがピアノが旅人の心を癒すのは駅だけではないようだ。

山陰の小京都**津和野**：3 時間足らずの寄り道だったがレンタサイクルで街外れの森鷗外記念館に足を延ばした。隣りの鷗外旧居と新旧が調和して一体となっていて、石見人 森林太郎と文豪 森鷗外の生涯にふれることができた。駅前に横たわる D51 が山口線の要所だったことを想わせる。萩と共通する教育熱心の土地柄を低い塀に囲まれた広い校地の小学校に感じた。

宇品と平和公園の**広島**：駅前から広電で終点まで行き広島港に降り立ったが、旧陸軍の兵站基地らしい面影は微塵もなく各地に向かうフェリーの港がすべてだった。「暁の宇品」に出てくる似島が目前にあっても、樹木に覆われて何のよすがも感じなかった。

折り返して平和公園に向った。修学旅行生で混雑を承知で画像と遺品を観てまわったが、整然とした展示に感動をおぼえず被爆の実態を知っただけなのは自らの感性が鈍くなったからだろうか。広島は仕事とリタイア後の活動でかなり知っているつもりだったが、今回はスケールの大きさと濃い緑に目を見張った。

終わりに 僅かながら認知の不安を抱えながらの旅だったが、予定通りに帰り着いた。ただし、スマホを何処かに置き忘れたのは重大な問題と自覚している。写真ソフトの不調が回復すれば改訂版をと考えている。 (終)

中西 卓@岡山